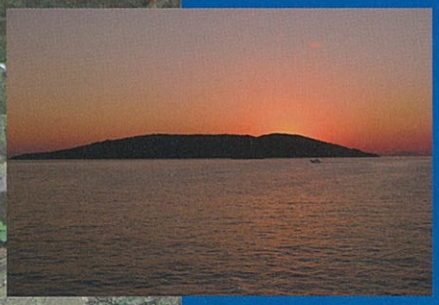
重要文化的景観

佐世保市黒島の文化的景観



佐世保市教育委員会

蕨（わらべ）にあるアコウの防風林と黒島の夕景

「佐世保市黒島の文化的景観」

黒島は、佐世保市の西に広がる九十九島と呼ばれる島しょ群に属し、その中の最大の島です。佐世保市では、平成20～22年度に、黒島において人々の生活の様子や自然環境、歴史等の調査を行いました。その結果、黒島の景観が全国的にも貴重な「文化的景観」であることが証明され、平成23年9月に島の全域（伊島、幸ノ小島、漁港区域を含む）が「佐世保市黒島の文化的景観」として重要文化的景観に選定されました。（文化的景観の説明は裏表紙をご覧ください。）

黒島は本土よりやや温暖な気候となっており、亜熱帯系の植物が生育しています。地質の関係から湧水が豊富で、「水島」の別称もありました。そのため古くから人の生活があり、最初の集落は14世紀ごろに形成されたと考えられています。江戸時代中頃までは平戸藩の牧場が置かれており、軍馬の飼育が行われていました。この頃までは黒島にはあまり多くの人が住んでいなかったことが分かっています。

黒島に人がたくさん住むようになったのは、江戸時代の終わり頃に牧場が廃止され、跡地の開拓が行われるようになってからでした。この頃から、特に西彼杵半島の外海地区などから人々が渡ってきて島のあちこちに集落が形成されました。渡って来た人々は海岸近くに防風林に囲まれた住居を構え、その背後の斜面を開拓していきました。多くの集落でこのような土地利用が繰り返され、特に島の南部の蕨(わらべ)集落では、防風林に使われたアコウの木が家の石垣に絡みついて生長した特長的な景観を見ることが出来ます。

特徴① 歴史的背景とそれが表れた景観

黒島が歴史の表舞台に登場するのは、文永8年（1271）の「青方文書」における記述が初めてです。そして、14世紀ごろには現在港のある本村(ほんむら)付近に集落が形成されていたようです。

江戸時代には平戸藩の牧場がありましたが、享和3年（1803）に開拓を優先して廃止され、その跡地を中心に、西彼杵半島などから「潜伏キリシタン」たちが移住しはじめ、現在につながる8集落が出来上がりました。

明治時代になると、黒島の潜伏キリシタンたちは、長崎に出向いて信仰を告白しました。しかし、長い間に洗礼の文言の一部が失われており、黒島での洗礼は無効とわかりました。驚いた信徒たちは改めて教理を勉強し、全員がカトリックとして復活することができました。この宗教的な盛り上がりが、黒島天主堂として結実したといえます。そして天主堂が建てられた名切(なきり)付近が、現在の島の中心と認識されています。

牧場の跡地を開拓してできた蕨（わらべ）集落

復活のシンボル、黒島天主堂

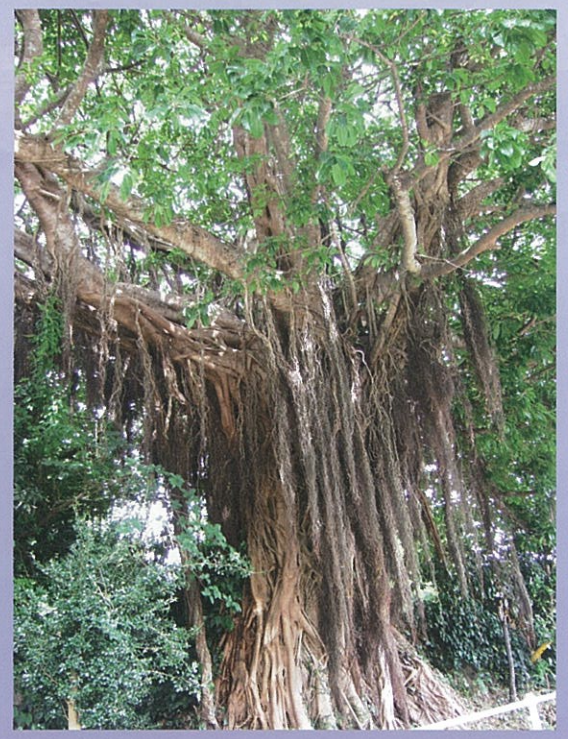
東堂平（とうどうびら）集落にある潜伏キリシタンの墓

特徴② 自然地理的背景と巧みな植物の利用

黒島は本土よりやや温暖で、亜熱帯系の植物が多く自生しています。島で暮らしてきた人々は、亜熱帯系の「アコウ」や黒島が北限の「サツマサンキライ」などの植物を防風林や食品として利用するなど、植物を非常に上手く生活の中に取り入れてきました。

特に防風林には家に植えるもの、畑に植えるものなど用途によって樹種を使い分けていたこともわかりました。島南部の蕨(わらべ)集落では夏の南風や西日の直射を防ぐ屋敷の南側に意識的に植えられていることがわかりました。そのため石垣に絡みついて生長したアコウの防風林が多く確認されており、独特の景観を形作っています。

サツマサンキライの葉を使った「ふくれ饅頭」



根谷（ねや）集落にあるアコウの防風林

特徴③ 伝統的な土地利用

黒島では多くの場所で、海→防風林→家屋→畑というパターンで、海岸から島の内部に向かって土地が使われています。これは、移住してきた人々が海から上がった場所に家と防風林を作り、その背後を開墾していったという過程を良く表しています。また、周辺の属島（伊島、幸ノ小島）を薪炭や牧草、肥料の供給地としていたことも注目に値します。

蕨（わらべ）集落における土地利用の例

黒島の文化的景観が秘める価値

このように、黒島の文化的景観は、「歴史的背景」、「自然地理的背景」、「人々の移住による文化の交流」、「巧みな植物の利用」が結びついて成立しており、島での人々の営みがいつ始まり、どのように土地を利用しながら世代を重ねていったのかということが明瞭に説明でき、その結果形成された伝統的な土地利用が現在に受け継がれているのです。これは、日本人が「島」という環境の中でどのようにして暮らし続けてきたのかということを理解するうえでの好例ということができ、黒島の文化的景観の本質的な価値ということができます。

集落を構成する要素

黒島の集落を構成する要素としては、各家々や耕作地のほかに、防風林(11)、船着場になっていた海岸(50～57)、墓地(72～84)、寺社や教会(5～10)などがあり、軍港に近かったことに由来する戦跡(85～92)もあります。

＜11.防風林＞夏の南風、冬の北西風の強い黒島では家や畑のまわりに防風林が発達しました。そのため家があることに気付かないこともあります。

＜50.名切ノ浜＞各集落に最寄の海岸は船着場となっていました。この名切ノ浜は黒島天主堂を建てるときに材木などが揚陸されました。海軍が造った突堤もあり、ヤシの実が漂着することもあります。

＜69.かっぱ塚＞本村の畑にある大岩で、かっぱのいたずらを封じたとの昔話があります。岩の上の石塔（右）は14世紀に造られたことが分かっています。

＜86.旧黒島東砲台発電所＞1914年に造られた砲台の発電所。佐世保軍港を守るためのもので、田代にも同じく砲台が造られていました。

＜5.黒島天主堂及び附属施設＞1905年にマルマン神父の指導で建てられた煉瓦造教会堂。黒島のシンボルであり、カトリックの人々の心の拠り所です。

＜7.興禅寺＞移住によって人口が増えたため1803年に創建されました。人口が増えつつあったことを記した梵鐘が保管されています。

文化的景観を守るためにお願いしたいこと

文化的景観は、人の営みそのものを文化財として保存を図る、いわば「生きている文化財」です。そのためほかの文化財とは異なり、時代とともに変化していくことはある意味当然と理解されています。しかしその変化とは「便利さの追求」と「文化の継承」との絶妙なバランスの上に成り立っているものであり、無秩序な開発によって容易に失われてしまうものでもあります。

それを防ぐためには、どこでどのような開発が計画されているのかを把握し、開発による変化をできるだけ緩やかなものとする必要があります。そのため、**黒島で建物の建設などを計画される場合は教育委員会までご相談ください。**

79.仕切牧墓地

黒島の文化的景観を構成する重要な要素

黒島の文化的景観は、文化庁が定めた基準のうち「水田・畑地など農耕に関する景観地」、「垣根・屋敷林などの居住に関する景観地」として独特のものと評価されています。そして、それらに無形の要素が深く結びついていることが本質的な価値といえます。つまり黒島の場合は人々が暮らす集落の構造自体に価値があり、それを良好に保全していくために、集落と集落を構成している要素を文化的景観の重要な構成要素と位置づけました。ここではそれら文化的景観を構成する重要な要素を紹介します。

黒島の集落

黒島には港から時計回りに本村（ほんむら）、東堂平（とうどうびら）、古里（ふるさと）、日数（ひかず）、根谷（ねや）、名切（なきり）、田代（たしろ）、蕨（わらべ）の８ヶ所の集落があります。このうち本村と古里には仏教徒の方が多く住み、それ以外の集落に住む人のほとんどがカトリックです。これはカトリックの人たちが後から島に渡ってきたことに由来しています。最も古い集落で港のある本村は、家々が密集する「集村」的な景観で、日本の典型的な漁村景観といえます。そして、主に移住した人たちが住んだ集落の多くは家が散らばる「散村」的な景観となっています。これは移住元にあった分家の習慣が黒島に持ち込まれたことによるものです。

＜本村＞黒島で最も古い集落。少なくとも14世紀ごろには成立していたことが分かっており、江戸時代の絵図に唯一描かれています。家々が密集した「集村」的な景観となっています。

＜田代＞1800年前後に西彼杵半島の外海地方からの移住者によって成立したと考えられています。防風林に囲まれた家々が点在する「散村」的な景観となっています。

＜東堂平＞海岸近くにはなだらかな低地が広がり、黒島では最も広い水田があります。1880年に修道院が建てられ、現在に至っています。沖合には属島の伊島、幸ノ小島が見え、その向こうには平戸島が見えます。

＜名切＞1880年に島内各地に住む信者が集まりやすいこの場所に教会が建てられました。それ以来島の中心と認識されています。現在のカトリック共同墓地も名切にあります。

＜古里＞1700年代末に針尾島などから移住した人々によって成立したと考えられています。大正時代には海軍の砲台が造られ、現在も煉瓦造の発電所の建物等が残されています。

19.本村の棚田

文化的景観を構成する重要な要素の分布図

重要な要素一覧

番号	種類	名称
1	工場	宝亀石材工場
2	〃	黒島石材工場
3	事業所	佐世保市相浦漁業協同組合黒島支所
4	〃	ながさき西海農業協同組合黒島事業所
5	寺社、教会	黒島天主堂及び附属施設
6	〃	お告げのマリア修道会黒島支部修道院
7	〃	興禅寺
8	〃	黒島神社
9	〃	金刀比羅神社
10	〃	蕨集落の仮御堂跡
11	防風林	集落の防風林
12	〃	根谷のアコウ
13	〃	根谷のサザンカ
14	〃	名切のサザンカ
15	景観木	本村のエノキ
16	〃	興禅寺のイヌマキ
17	竹林	集落の竹林
18	石造物	黒島港の三界万霊塔
19	棚田	本村の棚田
20	〃	白木谷の棚田
21	水田	東堂平の水田
22	畑地	根谷鼻の畑
23	〃	根谷の畑
24	〃	本村の畑
25	やぐら	屋根無しのやぐら
26	〃	屋根付のやぐら
27	溜池	岳池
28	水源	集落の水源
29	湧水	郭公谷の湧水
30	石切り場	田代の採石場
31	〃	海岸採石の跡

番号	種類	名称
32	公共施設（教育）	黒島小学校
33	〃	黒島中学校
34	公共施設（交通）	黒島旅客船フェリー乗り場
35	公共施設（教育）	黒島保育園
36	公共施設（行政）	黒島支所、公民館
37	公共施設（公園）	本村公園（本村役所跡）
38	公共施設（漁港）	黒島漁港白馬地区
39	〃	黒島漁港古里地区
40	〃	黒島漁港名切地区
41	〃	黒島漁港串ヶ浜地区
42	公共施設（道路）	市道
43	〃	里道
44	自然林	黒島神社社叢
45	〃	海岸林
46	〃	女瀬
47	属島	伊島
48	属島	幸ノ小島
49	海岸	黒島の海岸の岩場
50	〃	名切ノ浜
51	〃	蕨ノ浜
52	〃	小崎ノ浜
53	〃	東堂平ノ浜
54	〃	白木ノ浜
55	〃	里ヶ浦
56	〃	日数ノ浜
57	〃	根谷ノ浜
58	〃	串ノ浜
59	〃	伊島の海岸の岩場
60	〃	幸ノ小島の海岸の岩場

番号	種類	名称
61	河川	本村川
62	〃	白馬川
63	〃	番岳川
64	〃	小崎川
65	〃	黒島名切川
66	〃	黒島名切川支流
67	〃	日数川
68	〃	東堂平川
69	石造物	かっぱ塚
70	〃	信仰復活の碑
71	〃	興禅寺裏の石塔
72	墓地	興禅寺墓地
73	〃	興禅寺歴代住職墓所
74	〃	本村墓地
75	〃	小田墓地
76	〃	小田平墓地
77	〃	岳墓地
78	〃	田代墓地
79	〃	仕切牧墓地
80	〃	東堂平古墓
81	〃	東堂平墓地
82	〃	長谷墓地
83	〃	寄人の墓
84	〃	殉教墓

番号	種類	名称
85	戦跡	旧黒島南砲台発電所
86	〃	旧黒島東砲台発電所
87	〃	旧黒島東砲台探照灯格納庫
88	〃	白木の突堤
89	〃	旧名切砲台跡
90	〃	旧黒島発電所
91	〃	旧黒島番岳砲台聴音機跡
92	〃	旧黒島番岳砲台探照灯跡

文化的景観とは

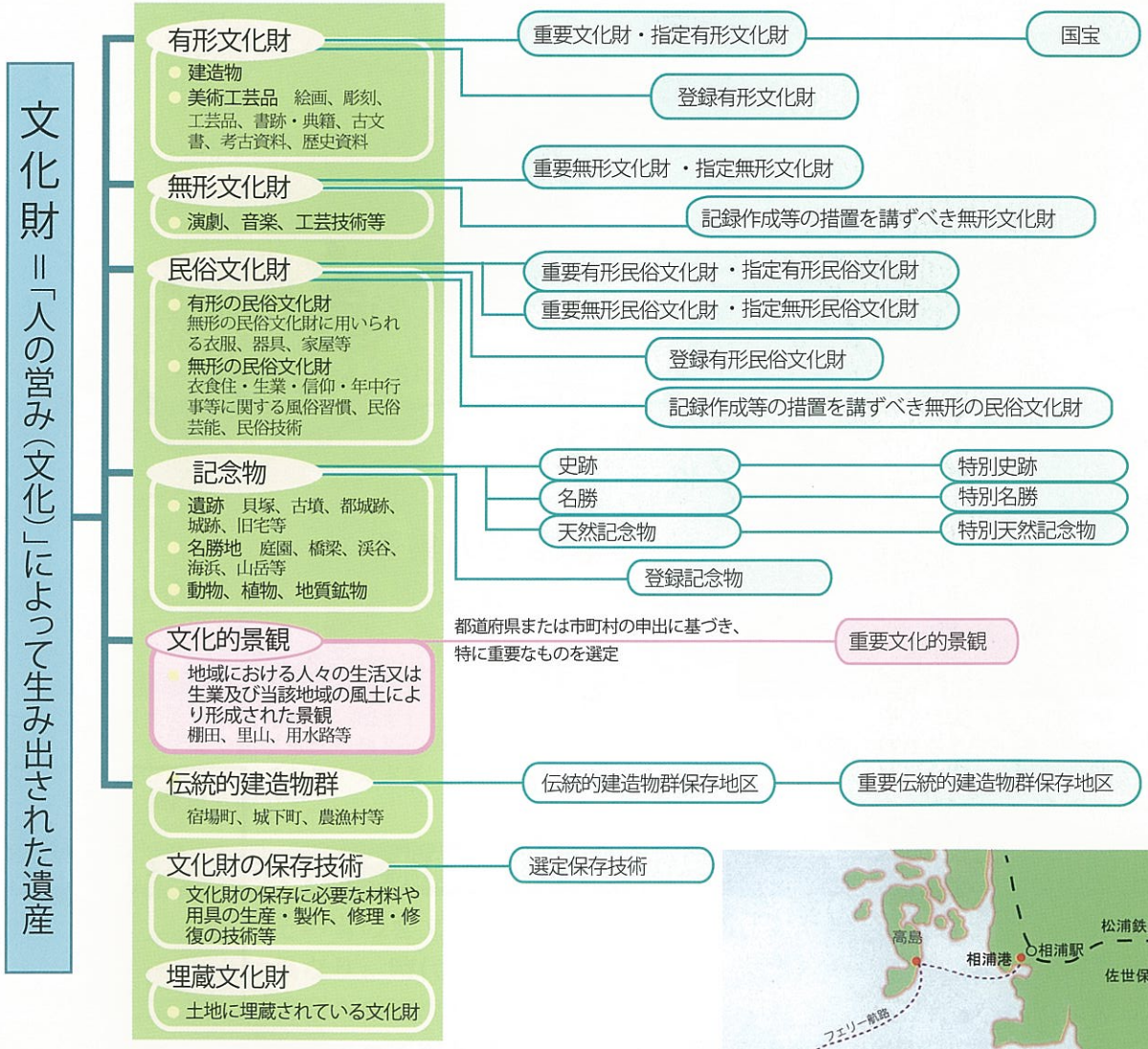
文化的景観とは、平成17年に設けられた文化財の一種です。文化財保護法では「地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のため欠くことのできないもの」と定義されています。

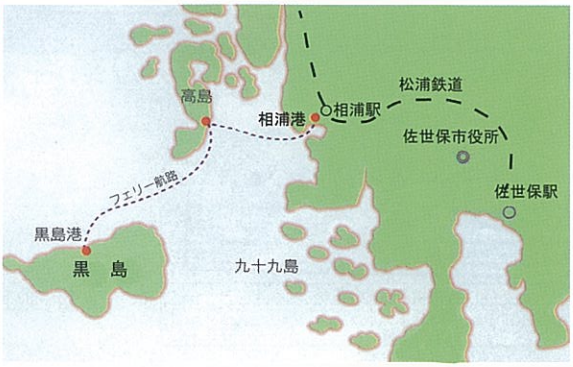
「文化的景観とは何か」ということを理解するためには、まず「文化」とは何かということを理解する必要があります。一般的に文化といった場合、絵画や音楽、演劇といった文化活動のことを連想する人が多いと思います。これは間違いではありませんが、これらの文化活動は文化のごく一部分を表しているに過ぎません。

では「文化」とは何か、というと、「人の営みそのもの」にほかなりません。人は生きていく過程で心の潤いを求めて絵を描き、音楽を奏でるのです。そして人の営みの中で生み出されてきた文物こそが「文化財」であり、人の営みによって形成された景観が「文化的景観」なのです。

文化的景観は、単純な景観（景色や眺め）ではなく、人の営みに根ざして形成された、人とその共同体、歩んできた歴史、自然環境が一体化したまとまりなのです。そのため人が生活し続けることこそが文化的景観を守る大きな要素であり、「生きている」文化財であるといえます。

文化財保護の体系





◆黒島へのアクセス
相浦港からフェリーで50分

重要文化的景観　佐世保市黒島の文化的景観
発　行：佐世保市教育委員会社会教育課
〒857-8585　長崎県佐世保市八幡町1-10
発行日：平成25年3月31日
印　刷：有限会社 立山印刷
〒857-0134　長崎県佐世保市瀬戸越4丁目1413-19